

法隆寺香木パフラヴィー文字刻銘再考

矢 島 洋 一

I.

今からおよそ四半世紀前、奈良法隆寺に伝存し現在は東京国立博物館に所蔵されている香木について驚くべき発見があった。法112号・法113号の番号が付された二つの香木の両方に記されている刻銘と焼印が、それぞれパフラヴィー文字とソグド文字であったことが判明したのである。それらの香木は漢字墨書から八世紀半ばには既に日本に伝来していたものと考えられている。古代日本に中期イラン語の文字が伝わっていたこと自体大きな驚きであるが¹、それらの文字が香木に記されている現存例は世界中を見ても他に皆無であることを考えれば、件の香木は東西交流史上・イラン学上まぎれもなく第一級の貴重な資料と言えるだろう。本稿は、うちパフラヴィー文字刻銘について新釈を提示することを目的とする。

両香木に記された文字は、字形の細部に違いはあるものの明らかに同一の語を表したものである。そのパフラヴィー文字についてはこれまで複数の解説・解釈が提示されているが、最もよく受け入れられているのは、それらがイラン語の文字であることを初めて報告した東野治之氏の論文に付せられた熊本裕氏による補説において提示されているもので、ボーフトーイ *bwhtwdy /bōxtōy/* という人名とする説である²。以下、まずこの文字の解説について別案を提示し、その読みを踏まえてこれらの香木の背景について若干の考察を行いたい。

II.

図一・図二はそれぞれ法112号・法113号の刻銘を主に東野氏の論文に掲載されている写真から模写したものである。これらの刻銘がパフラヴィー文字であること自体に疑いの余地はないが、刻線がかなり乱れているためそのままでは全ての文字を判読することはできず、どこかで刻線の欠落か、既知の書体でない

字形を想定せざるを得ない。従ってその解説においては、字形の補正の妥当性とその補正によって得られる解釈の妥当性との間で妥協点を探っていくことになる。結論から言うと、筆者はこれを *bwy Y cndl /bōy ī čandal/* と読みたい。パフラヴィー語で *bōy* は「香り」、*ī* はここでは「～の～」、*čandal* は「白檀」を意味する。すなわちこの刻銘は「白檀香」を表していると考ええる。

法112号・法113号二つの香木はまさに白檀である。専門家以外には区別が付きにくい香木にその種類を記すのはありそうなことであり、現に法隆寺香木には香木名を墨書したものが含まれている。また *čandal* の語はパフラヴィー語文献に在証され、イラン版『ブンダヒシュン』に以下のような一節がある³。

[Transliteration:] KRA ME lyšk¹ 'ywp¹ twt¹ 'ywp¹ d¹l bwd¹k cygwn kwndlg wlyšt¹ kwst¹ hwlng W cndl plngmšk k'kwlk¹ k'pwl w'try bwy 'p'ryk MN ZNE šwn bwy d¹l KRYTWNd

[Transcription:] har čē rēšag ayāb tōz ayāb dār bōyāg čiyōn kundurg, waryašt, kawast hurang ud **čandal**, palang-muš, kākūlag, kāpūr, wādrang⁴-bōy, abārīg az ēn šōn bōy-dār xwānad

根や皮⁵や木が香るもの、例えば乳香、ワルガシュト⁶、良い色のコロシント、白檀、カラミント、カルダモン、樟脳、メリッサなどを香料と呼ぶ。

これらのことから、「白檀香」の読みは解釈としては大きな問題はないと言えるだろう。問題は、そう読むための字形の補正がパフラヴィー文字の読みとして許容範囲に留まっているかである。以下に筆者による各文字の判読を提示し、識者の判定を仰ぎたい。

まず①と②がそれぞれ *b* と *w/n/r* であることは従来の判読通りで疑いの余地はない。

③④はこれまで合わせて 'h 一字と考えられていたが、ここでは d/g/y が二つ連続したものとする。それらはパフラヴィー文字では区別がつかないことがある。

⑤は c と読む。ここは法112号と法113号の間で最も異なる部分で、従来前者のみに見える環や直線を重視して t と読まれてきたが、後者の字形は t よりはむしろはるかに c に近いし、前者も c の刻線を二度書きすることで近い形になりそうである。

⑥は従来の判読通り問題なく w/n/r である。

⑦と⑧は従来の読みでは d/g/y の連続とするが、ここでは⑦に関しては d/g/y と読み、⑧は l と読む。l は本来大きく左上に伸びた形で書かれるべきものだが、より小ぶりに 〉 の字状に書かれることも少なくない⁷。それにしても法112号の方は l にしては短かすぎるが、この刻銘は香木の左端に刻まれているので、それ以上大きく伸ばすことができなかったとすれば説明がつくし、またそう考えればむしろ刻線の傾きは l の一部として相応しいように見える。

比較のため、図三に従来の読みを、図四に筆者の読みをより整った一般的なパフラヴィー文字で表したものを挙げておく。

III.

法隆寺香木にパフラヴィー文字刻銘とソグド文字焼印があることが発見されたことを受け、その背景たるインド洋における香木貿易について詳細な考察を行ったのが家島彦一氏である⁸。家島氏は主にアラビア語史料を用いて白檀や沈香の産地や流通状況について検討すると共に、香木に刻印を打つ習慣が確かに存在したこと、またイラン人商人がソグドからイラクを通過して海上交易にも携わっていたことなどをも示した⁹。その研究により、我々はイラン語が記された香木が日本に伝わった背景、特にその流通経路と流通の担い手についてかなり実証的に知ることができるようになった。そして問題のパフラヴィー文字がイラン人名を表すとするなら、それは香木の所有者、おそらくは流通を担っていたイラン人商人名だったと考えられる。しかしその文字を人名でなく香木名と解釈することで、この香木に関わる別の人間像を思い描くことができる。すわなち香木の消費者である。

法隆寺の香木に刻まれた文字が「白檀香」という香

木名を意味するとするなら、それは商品名を示すラベルであったことになる。そしてそのようなラベルを必要とするのは、外見や香りから容易に香木の種類を判別できたであろうプロの香木商人よりは、それを購入する消費者だったろう。イラン人以外による使用が拡大していった後世の新ペルシア語と異なり、中期イラン語を読む人間の多くはイラン人であり、当時のイラン人は一部の仏教徒やマニ教徒やキリスト教徒を除けば多くがゾロアスター教徒だった。そしてゾロアスター教儀礼において白檀はよく用いられる香木だったのである¹⁰。

古くは『アヴェスター』中の除魔書「ウィーデーウダート」8章2節に以下のような一節がある¹¹。

āat mraot ahurō mazdā / upairi daxma aēšaiian /
vī daxma caēšaiian: / yezi aētəm iristəm upa.bərəθ-
βōtarəm auuazanām / auua aētəm iristəm baraiian
/ auuaθa nmānəm hərəzaiian / upa aētəm nmānəm
baoθaiian / uruuāsnaiiā vā / vohu.gaonahe vā / vohu.
kərətōiš vā / haθānaēpataiā vā / kamciθ vā hubaoiθ-
itəmanām uruuaranām -

そしてアフラ・マズダーは言った。「ダフマ¹²を探せ。ダフマを整えよ。もしその死体を運び出せることがわかったら、その死体を運び去れ。家はそのままにしておけ。その家を燻せ。ルワースナーか、ウォフ・ガオナか、ウォフ・クルティか、ハザーナエーパターか、何らかの香りの良い植物の〔香りで〕。」

ここで挙げられている四つの香料は、順に白檀・安息香・沈香・柘榴を指すとされる¹³。白檀の香りは死体による穢れを浄める効果をもつと考えられていたのである。

ゾロアスター教儀礼における白檀の使用は、十一世紀に書かれたペルシア語恋愛叙事詩、グルガーニー『ヴィースとラーミーン』からも窺うことができる。『ヴィースとラーミーン』は前イスラーム期、おそらくはパルティア時代のイランに起源をもつ恋愛物語であり¹⁴、グルガーニー自身の言によればまさにパフラヴィー語から訳したものという。マルヴのモーバド王の妻ヴィースは、王の弟ラーミーンと不倫の恋におちる。妻の不貞を察した王は、ヴィースに炎をくぐることで身の潔白を証明させようと火を焚き始める。以下

はその一節である¹⁵。

zi ātašgāh laḥti ātaš āward

ba maydān-i ātaši čūn kōh bar kard

basī az **šandal**¹⁶ wa ‘ūd-aš ḥwuriš dād

ba kāfūr wa ba mušk-aš parwariš dād

〔王は〕 拜火壇から火種を取り出し

山のような火焚き場に火をつけた

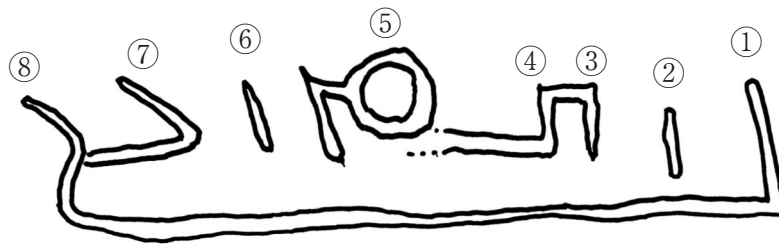
そこに沢山の**白檀**と沈香をくべて

樟脳と麝香でそれを煽り立てた

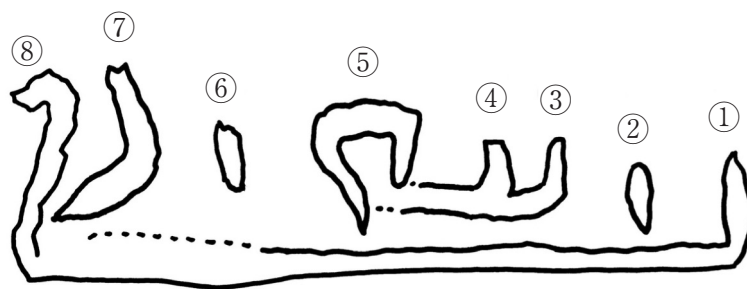
ここでは神判の小道具として白檀などの香木が用いられており¹⁷、やはり白檀は宗教儀礼に供されるものだったことがわかる。

前イスラーム期のイラン人の多くはゾロアスター教徒であり、ゾロアスター教儀礼において白檀は頻用される香木だった。原産地である東南アジアや南アジアで白檀を仕入れて海上交易を行っていた古代の香木商人にとって、イラン人は重要な顧客だったろう。法隆寺の香木も、本来イラン人に売ることを想定してパフラヴィー文字で香木名を刻んでおいた在庫品が何らかの理由で本来の流通ルートを外れて日本にまで伝わってきたものなのではないか。しかしその理由は今のところ分からない。本稿で提示した新たな解釈は、また一つ新たな謎を生むことになる。

図一 法 112 号刻銘模写



図二 法 113 号刻銘模写



図三 従来の読み

رحم

図四 筆者の読み

رحم

注)

1 日本にはいくつか中期イラン語資料が存在するが、同時代において日本に伝来したものはこれらの香木のみであり、他はすべて近代以降になって将来されたものである。日本現存の中期イラン語資料については、吉田豊「日本に保管されている中世イラン語資料について—付録 北京図書館所蔵のソグド語文書—」『アジア言語論叢』2 (『神戸市外国語大学外国学研究』39), 1998, pp. 101-120を参照。

2 東野治之「法隆寺献納宝物 香木の銘文と古代の香料貿易—とくにパフラヴィー文字の刻銘とソグド語の焼印をめぐって—」『Museum 東京国立博物館美術誌』433, 1987, pp. 4-18 (再録・東野治之『遣唐使と正倉院』東京: 岩波書店, 1992, pp. 161-187)。以下従来の読みと言えはこの解釈を指す。なおこれらの香木は2010年に平城京遷都1300年を記念して奈良国立博物館で開催された「大遣唐使展」にも出展された。その図録には香木のカラー写真が掲載され、解説ではやはり人名説がとられている (奈良国立博物館 (編)『平城遷都一三〇〇年記念 大遣唐使展』奈良国立博物館・読売新聞大阪本社・NHK・NHK プラネット近畿, 2010, pp. 18, 290)。

この読み以外には、管見の限りこれまで以下の三つの解説案が提示されている。まず井本英一氏は bwhtwl と読み、「救世主」を意味する bwht'l / bōxtār/ の方言形とする (井本英一「法隆寺伝来の白檀と栴檀—ゾロアスター教徒の使った香木か—」毎日新聞 (夕刊) 1987年6月3日4面)。一方伊藤義教氏は bw'twlk 「汝は救われたもの (であれかし)」と解釈する (伊藤義教「渡来ベルシャ人の〴〵におい、—法隆寺の香木を推理する—」朝日新聞 (夕刊) 1987年7月22日9面; 同「法隆寺伝来の香木銘をめぐって」『東アジアの古代文化』54, 1988, pp. 96-103 (再録・伊藤義教『ゾロアスター教論集』東京: 平河出版社, 2001, pp. 201-209))。またフィリップ・ジヌー氏は熊本氏の解釈に対する短評において、人名としては語尾が -wk' の方が相応しく /buxtōg/ と読むべきとした (Philippe Gignoux, "94. Kumamoto, H. "Inscriptions on the Scented Woods in the Hōryūji Treasures and Ancient Incense Trade, On the Pahlavi Inscription". *Museum* (Art Magazine ed. by the Tokyo National

Museum) n° 433 (April 1987) p. 16 (en japonais).", *Abstracta Iranica* 11, 1988, p. 28)。

なお同じ香木に捺されたソグド文字焼印については同じく東野氏の論文に吉田豊氏が補説を寄せ、重量ないし貨幣単位を表すものと推測している。ただしソグド文字ではなく漢字とする説もある (星野聡「法隆寺献納宝物の香木の刻銘と焼印について」『弘前大学国史研究』100, 1996, pp. 1-9)。

3 テキストは所謂 TD2写本によるが (Ervad Tahmuras Dinshaji Anklesaria (ed.), *The Būndahishn: Being a Facsimile of the TD Manuscript No. 2 Brought from Persia by Dastur Tīrandāz and Now Preserved in the Late Ervad Tahmuras' Library*, Bombay: British India Press, 1908, p. 118)、適宜 TD1写本をも参照した (Peshotan K. Anklesaria (ed.), *The Bōndahesh, Being a Facsimile Edition of the Manuscript TDI*, Tehran: Iranian Culture Foundation, n. d., p. 97/f. 48r)。なお DH 写本はこの部分を欠く。解釈においては、Edward William West (tr.), *Pahlavi Texts, Part I, The Būndahis, Bahman Yast, and Shāyast lā-shāyast*, Oxford: The Clarendon Press, 1880, pp. 102-103; 野田恵剛「ブンダヒシュン (II)」『貿易風—中部大学国際関係学部論集—』5, 2010, pp. 156-157 をも参考にした。

4 テキストでは TD2: w'try; TD1: w'trn であるが、w'trng /wādrang/ の誤りと見て読み替える。wādrang-bōy は新ペルシア語 bādrangbōya 「メリッサ」に対応する。

5 テキストでは twt^l であるが、twc /tōz/ 「皮」の誤りと見て読み替える。

6 新ペルシア語 bargāšt ~ bargast に対応する。bargast は現代ペルシア語ではルリマツリ (plumbago) を意味するが (Muḥammad Mu'in, *Farhang-i Fārsī*, vol. 1, Tihārān: Mu'assasa-yi Čāp wa Intiṣārāt-i Amīr Kabīr, 1342/1963, p. 505)、香料として用いる例は確認できなかった。あるいは当時この語は別の植物を指したのかもしれない。

7 典籍における整った字体と異なり、文書などにおいて用いられた筆記体パフラヴィー文字の解読は困難を極めるが、幸い文字の徹底的な比較分析により多数のパフラヴィー語文書を解読した Dieter Weber, *Berliner Pahlavi-Dokumente: Zeugnisse spätsassanidischer Brief- und Rechtskultur*

- aus frühislamischer Zeit*, Mit Beiträgen von Myriam Krutzsch und Maria Macuch, Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, 2008 が多く出た文字のサンプルが得られるようになった。1 の様々な字体については同書 pp. 217-218を参照。
- 8 家島彦一「法隆寺伝来の刻銘入り香木をめぐる問題—沈香・白檀の産地と7・8世紀のインド洋貿易—」『アジア・アフリカ言語文化研究』37, 1989, pp. 123-141 (再録・家島彦一『海域から見た歴史—インド洋と地中海を結ぶ交流史—』名古屋：名古屋大学出版会, 2006, pp. 505-532); 家島彦一(訳注)『中国とインドの諸情報2 第二の書』東京：平凡社, 2007, p. 78.
- 9 ただしそれを伝えるのが十世紀のマスウディー(al-Mas'ūdi)であるため、それ以前におけるソグド商人の海上交易への進出を認めることに対しては慎重な意見もある。Yoshida Yutaka, "Additional Notes on Sims-Williams' Article on the Sogdian Merchants in China and India," Alfredo Cadonna & Lionello Lanciotti (eds.), *Cina e Iran: da Alessandro Magno alla Dinastia Tang*, Firenze: Leo S. Olschki Editore, 1996, p. 75.
- 10 イラン文化における香料の役割について包括的に扱った最近の研究として Mehr Ali Newid, *Aromata in der iranischen Kultur: Unter besonderer Berücksichtigung der persischen Dichtung*, Wiesbaden: Reichert Verlag, 2010がある。白檀については同書 pp. 134-145で扱われており、本稿でも参考にした。
- 11 Karl F. Geldner (ed.), *Avesta: the Sacred Books of the Parsis, III, Vendidad*, Stuttgart: W. Kohlhammer, 1896, p. 57; TITUS Text Collection Avesta Corpus by Sonja Fritz, J. Gippert, H. Kumamoto, M. de Vaan et al., 2008.12.9 (<http://titus.uni-frankfurt.de/texte/etcs/iran/airan/avesta/avest.htm>); Fritz Wolff, *Avesta: die heiligen Bücher der Parsen*, Strassburg: Verlag von Karl J. Trübner, 1910, p. 365; 岡田明憲『ゾロアスター教の悪魔払い』東京：平河出版社, 1984, pp. 198-199.
- 12 ゾロアスター教で曝葬(鳥葬)を行う施設のこと。
- 13 Martin Haug, *Essays on the Sacred Language, Writings, and Religion of the Parsis*, 3rd ed. edited & enlarged by E. W. West, London: Trübner & Co., 1884, p. 251. この四つの香料は、「ウィーデーウダート」中で他に8章3・79節、9章32節、14章3節、18章71節でも言及されている。「白檀」を表すとされるルワースナー *uruuāsna* の語源は不明であるが、サンスクリット語 *rauhīṇa* 「白檀」と関係あるか。
- 14 『ヴィースとラーミーン』には以下の日本語全訳がある。F. A. グルガーニー, 岡田恵美子(訳)『ヴィースとラーミーン—ペルシアの恋の物語—』東京：平凡社, 1990. 本稿で引用した箇所は同書 p. 205に対応する。
- 15 Faḥr al-dīn As'ad Gurgānī, *Wīs wa Rāmīn*, ed. Muḥammad Rawṣan, Tih-rān: Ṣidā-yi Mu'āṣir, 1377/1998, p. 153.
- 16 ペルシア語 *č* はアラビア語では多くの場合 *ṣ* となり、白檀はアラビア語で *ṣandal* という。新ペルシア語はアラビア語から大量の語彙を借用しているため、ここでもアラビア語から逆輸入した形が用いられているのだろう。
- 17 不倫は一般に極めて立証困難な罪であるため、その裁定を神判に委ねる例は東西に多く見られる。西アジアにおいては古くウルナンム法典(前2100年頃)において既に不倫が疑われる女性を川に投げ込む神判が見られ(Martha T. Roth, *Law Collections from Mesopotamia and Asia Minor*, 2nd edition, Atlanta: Scholars Press, 1997, p. 18)、後のハンムラビ法典などにも受け継がれている。ヨーロッパの例としては赤坂俊一『神に問う—中世における秩序・正義・神判—』京都：嵯峨野書院, 1999, pp. 66-72、日本の例として清水克行『日本神判史—盟神探湯・湯起請・鉄火起請—』東京：中央公論新社, 2010, pp. 26-29をそれぞれ参照。